NEW JAPAN PHILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2025/2026シーズン

5
May, 2025

6
June, 2025

2025/2026 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 5, 6月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #663　石川亮子　1
すみだクラシックへの扉 #31　小室敬幸　9
楽員ストーリーズ ㊽　佐古健一 (チェロ)　15
NJP from Inside　16
NJP 6月、7月公演　柴田克彦の鑑賞ポイント　19
2025 / 2026シーズン　定期演奏会プログラム　20
お客様からの声　27
室内楽シリーズ　29
「パトロネージュ・システム」のご案内　34

■特別支援企業
オリックス
鹿島
CCC
大和証券
東京東信用金庫
NOMURA
フジサンケイグループ
三井住友銀行

■特別支援団体
公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルよりグッズをプレゼント！

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。
@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願いいたします。

https://www.njp.or.jp/qs

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2025-2026 Season
#663

5.23 [金]
サントリーホール・シリーズ
新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第663回定期演奏会
2025年5月23日（金）19時00分
サントリーホール

5.24 [土]
トリフォニーホール・シリーズ
新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第663回定期演奏会
2025年5月24日（土）14時00分
すみだトリフォニーホール

◉ルトスワフスキ (1913–94)
オーボエとハープのための二重協奏曲 ＊　約20分
Witold Lutosławski: Double Concerto for Oboe, Harp, Percussion and String Orchestra ＊
Ⅰ. Rapsodico
Ⅱ. Dolente
Ⅲ. Marciale e grotesco

◉ヴェレシュ (1907–92)
ベラ・バルトークの思い出に捧げる哀歌　約15分
Sándor Veress: Threnos in memoriam Béla Bartók

◉ルトスワフスキ
葬送音楽―バルトークを偲んで―　約15分
Witold Lutosławski: Muzyka żałobna (Musique funèbre)

―― 休憩20分 ――

◉メンデルスゾーン (1809–47)
序曲「フィンガルの洞窟」op. 26　約10分
Felix Mendelssohn Bartholdy: The Hebrides overture, op. 26

◉メンデルスゾーン
交響曲第4番 イ長調 op. 90「イタリア」　約30分
Felix Mendelssohn Bartholdy: Symphony No. 4 in A major, op. 90, “Italian”
Ⅰ. Allegro vivace
Ⅱ. Andante con moto
Ⅲ. Con moto moderato
Ⅳ. Saltarello: Presto

[指揮・オーボエ] ハインツ・ホリガー
Heinz Holliger, Conductor / Oboe
[ハープ] 吉野直子 ＊
Naoko Yoshino, Harp ＊
[コンサートマスター] 西江辰郎
Tatsuo Nishie, Concertmaster
[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞
Mai Tategami, Assistant Concertmaster

演奏会アンケートはこちらから
https://www.njp.or.jp/qs

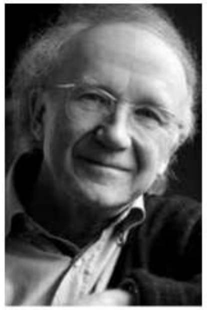
■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール（公益財団法人墨田区文化振興財団）[5/24公演]
■助成：公益財団法人アフィニス文化財団
文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人 日本芸術文化振興会
■特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人オリックス宮内財団

Affinis MÉDAILLE　文化庁

オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

Profile



©Priska Ketterer

ハインツ・ホリガー［指揮・オーボエ］
Heinz Holliger, Conductor / Oboe

ジュネーヴとミュンヘン両国際音楽コンクールでの優勝を機に、国際的な演奏家としての比類ないキャリアを築き上げてきたホリガーは、世界各地の主要コンサートホールで聴衆を魅了してきた。作曲家、演奏家双方の活動を通じてオーボエの技術的な可能性を広げた功績は特筆に値し、現代を代表する数々の作曲家たちが彼に作品を献呈している。
2015年スイス音楽大賞、22年ドイツ・マインツ市科学アカデミーのシューマン賞を受賞。16年には米国芸術科学アカデミー外国人名誉会員に選出されている。
指揮者としても、世界の一流オーケストラやアンサンブルと共演。作曲家としても世界各地から作曲のオファーが途絶えることがなく、作品はショット・ミュージック・インターナショナル社から出版されている。ロベルト・ヴァルザーの小劇『白雪姫』をモチーフとしたオペラはチューリッヒ歌劇場で上演され、国際的な注目を集めた。2018年には新作オペラ『ルネア』がチューリッヒ歌劇場で制作され、その旺盛な創作意欲はとどまることを知らない。
テルデック、フィリップス、ECM、SWR/Hänssler、Auditeから多数の録音を発表。2022年には、自身のオペラ『ルネア』がECMよりリリースされた。

©Akira Muto

吉野直子［ハープ］ Naoko Yoshino, Harp

ロンドン生まれ。6歳よりロサンゼルスにて、スーザン・マクドナルド女史のもとでハープを学び始めた。1985年第9回イスラエル国際ハープ・コンクールに参加者中最年少で優勝。
これまでに、世界各地でソロ・リサイタルを行うとともに、ベルリン・フィル、イスラエル・フィル、フィラデルフィア管、小澤征爾、メータ、クレーメル、パユなど、国内外の主要オーケストラ、指揮者、ソリストと数多く共演を重ねている。また、ハープの新作にも意欲的に取り組み、武満徹「そして、それが風であることを知った」、細川俊夫「ハープ協奏曲」など初演した作品は数多い。
CD録音も活発に行っており、2016年からは自主レーベルのグラツィオーソ(grazioso)による新たな録音プロジェクトを開始。毎年切り口を変えた「ハープ・リサイタル」シリーズをリリースし、いずれも非常に高い評価を受けている。最新盤は「ハープ・リサイタル～Intermezzo～」。国際基督教大学卒業。2021年度毎日芸術賞特別賞を受賞。

Program Notes ◉石川亮子［音楽学］

オーボエ奏者、指揮者、作曲家として世界的に活躍を続けるホリガーは、自他ともに認める「シューマニアーナ」としても知られる（そのシューマンへの愛から、シューマン晩年のピアノ小品集「暁の歌」と同名の作品も作曲されている）。一方、インタビューのなかでホリガーは、メンデルスゾーンについて「指揮者として最初のうちは全く演奏することはなかった」と語っている。シューマンとメンデルスゾーンはともに19世紀ロマン派の重要な作曲家であったにもかかわらず、家系ゆえにナチス・ドイツによって演奏を禁止されたこと等から、メンデルスゾーンの受容は大幅に遅れることになった。本日演奏されるのは、時代の趨勢のなかで政治や社会に運命を翻弄された作曲家たちの作品である。そう考えると、メンデルスゾーン、ヴェレシュ、ルトスワフスキという、時代も様式も異なる作曲家を組み合わせたホリガーの意図が見えてくるだろう。

■ ルトスワフスキ：オーボエとハープのための二重協奏曲

20世紀ポーランドを代表するひとり ▶

ポーランドが生んだ作曲家と言えばショパン、シマノフスキ、そして20世紀を代表するひとりがヴィトルト・ルトスワフスキ（1913~94）である。1993年には20世紀音楽の世界的な巨匠として京都賞を受賞。作風は年代を追うごとに変化していったが、そこにはポーランドという国の歴史が色濃く反映している。

ホリガーの演奏を想定して作曲 ▶

二重協奏曲はスイスの指揮者で、偉大なる音楽のパトロンであったパウル・ザッハーからの委嘱作品のひとつ。ザッハーが敬愛するホリガーのための作品をルトスワフスキに依頼したのは、1970年代初めのこと。その際ホリガーは、ハープ奏者である妻ウルスラのためのパートを含めるようリクエストした。オーケストラの編成が、2人の打楽器奏者と12の弦楽器となっているのは、ソリスト群との音響バランスの考慮からだろう。初演は1980年8月24日、ハインツ&ウルスラ・ホリガー、ザッハー指揮のコレギウム・ムジクム・チューリッヒによって行われた。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

曲は協奏曲の伝統にならった急・緩・急の3楽章からなる。ルトスワフスキは1960年代にもたらされたケージの「偶然性」を、ルトスワフスキ流の「管理された偶然性」（部分的に小節線が引かれておらず、各パートがそれぞれ決められた範囲のなかで音の動きを繰り返すことで、全体で混沌とした音響を生み出す）として確立させたが、本作もその延長線上にあると言える。現代的な響きの一方で、第1楽章はバロック協奏曲のリトルネッロ形式を、第3楽章はプロコフィエフ風の「グロテスク」な音楽を模し

たものとなっているのは興味深い。

[楽器編成]オーボエ独奏、ハープ独奏、ティンパニ、シロフォン、グロッケンシュピール、マリンバ、ヴィブラフォン、トムトム、ボンゴ、大太鼓、シンバル、ゴング、タムタム、タンバリン、小太鼓、テナードラム、トライアングル、ジャニーズ・ウッドブロック、チャイニーズ・テンプルブロック、弦楽。

■ ヴェレシュ：ベラ・バルトークの思い出に捧げる哀歌

故郷ハンガリーからスイスへ ►

シャンドール・ヴェレシュ(1907~92)はハンガリー・コロジュヴァール(現ルーマニアのクルジュ=ナポカ)生まれ。ブダペストのリスト音楽院でバルトークとコダーイに師事した後に、1929~33年には民族音楽学も学んだ。1943年からは母校で作曲を教えるようになるが(この時の学生にリゲティ、クルタークがいる)、1949年にベルン大学に客員教授として招かれたことをきっかけに、スイスに永住。そのためハンガリーでは長年ヴェレシュの名前は消されたままとなったが、ホリガー(ベルン音楽院での作曲の弟子であった)が積極的に演奏会で取り上げたこと等もあって、スイスだけでなくハンガリーにおけるヴェレシュの功績が注目されるようになっていった。

バルトークの訃報を受けて ►

「ベラ・バルトークの思い出に捧げる哀歌」は1945年9月、ハンガリー芸術評議会がブダペストの文化生活の再開を祝して3人の作曲家にオーケストラ作品を委嘱した、その1作として作曲された。当初ヴェレシュは戦争とファシズムの犠牲者に捧げる作品を書き始めたが、1945年9月26日バルトークがニューヨークで死去という知らせが届く。ヴェレシュは後に当時を「ハンガリー人は皆、バルトークは帰って来ると信じていた」と回想している。ヨーロッパの歴史的伝統と、自らのルーツとしてのハンガリー的なもの。本作においても、小さな動機から大きなアーチ構造が作り上げられていくなかで、エキゾチシズム漂う民謡的な旋法や、ハンガリー民俗音楽の嘆きの歌のメロディー等を聴くことができる。

[楽器編成]フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、小太鼓、大太鼓、シンバル、吊しシンバル、ハープ、弦楽5部。

■ ルトスワフスキ：葬送音楽―バルトークを偲んで―

転機となった出世作 ►

1958年に完成された「葬送音楽」は、ルトスワフスキの転換期となり、また出世作となった作品である。ルトスワフスキはワルシャワ音楽院でピアノと作曲のディプロマを取得。そのすぐ後、1939~45年までポーランドはナチス・ドイツに占領され、戦後はソ連の勢力圏のなかで社会主義リアリズムの要請にさらされた。ルトスワフスキの作風も戦前の新古典主義から、戦後は民族主義的な傾向を強めていったが、それでも同時代の音楽への関心が失われたわけではなく(当時ポーランドにおける抑圧は、本国ほど苛烈ではなかった)、その探究は12音技法をルトスワフスキ流に用いた、「葬送音楽」として結実することになった。

音楽の特徴～2つの音程を核に ►

1954年、ルトスワフスキは指揮者ヤン・クレンツからバルトーク没後10年を記念する作品を書くことを提案された。「葬送音楽」というタイトルの意味は、ここに由来している。曲の基本となるのは、「ファ・シ・シ♭・ミ・ミ♭・ラ・ラ♭・レ・レ♭・ソ・ソ♭・ド」の12音音列。音列をよく見ると、「ファ・シ」「シ♭・ミ」と増4度の音程が6つ並び、その間を「シ・シ♭」のように短2度でつないでいることが分かる。曲においても、この2つの音程が支配的な〈プロローグ〉から始まり、それらが拡散する〈変容〉、そして12音音列が和音として鳴り響く(激しいトーンクラスターとなる)〈頂点〉の後に、〈エピローグ〉で2つの音程を示しながら閉じられる。

[楽器編成]弦楽5部。

■ メンデルスゾーン：序曲「フィンガルの洞窟」op. 26

作曲の経緯 ►

ドイツ・ロマン派前半を代表する作曲家、フェリックス・メンデルスゾーン(1809~47)は、17歳で作曲した序曲「夏の夜の夢」を挙げるまでもなく、早熟の天才として知られる。1829年3月バッハの「マタイ受難曲」を蘇演したメンデルスゾーンは、同年4月末に初めてロンドンを訪問。「フィンガルの洞窟」はシーズン後、スコットランドを旅した際に訪れた、ヘブリディーズ諸島のスタッファ島にある海の洞窟(すなわちフィンガルの洞窟)から着想を得て作曲された。

曲の背景と音楽の特徴 ►

フィンガルとは、当時ヨーロッパで流行していた『オシアンの詩』に登場する、3世紀頃スコットランドで活躍したケルト王の名前。メンデルスゾーンは自然の風景と、これら伝説の物語を重ね合わせながら曲を書いたと推察される。作品は1830年に完成。1832年に改訂され、メンデルスゾーン自身が付けたタイトルは、当初の「孤島」から「ヘブリディーズ諸島」へと変更された。曲は演奏会用序曲の慣例に従った、ソナタ形式による。冒頭から聴かれる第1主題は、ロ短調で荒涼とした大西洋のうねりを思わせる。一方、第2主題は明るい太陽の光を感じさせるニ長調で提示されるが、2つの主題がいずれも4度下降の動機を含むことで全曲を一貫したものにしている。

［楽器編成］フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ メンデルスゾーン：交響曲第4番 イ長調 op.90「イタリア」

作曲の経緯 ►

メンデルスゾーンは先のイギリスとスコットランドに続いて、1830年からイタリア各地を旅行。交響曲「イタリア」もまた、旅から生まれた名作であることは、ローマ滞在中の1831年2月22日、「交響曲『イタリア』は大いに進展しました。それは私がこれまで書いたなかで、そしておそらくこれから書くなかでも、最も愉快な作品となるでしょう」とベルリンの家族に宛てて書き送られたなかにも示されている。作品は1832年11月に届いた、ロンドンのフィルハーモニック協会からの委嘱に合わせて翌年3月13日に完成。5月13日に作曲者自身の指揮で行われた初演も大成功を収めたが、メンデルスゾーンがさらなる改訂を続けたことは広く知られる通りである。

イ長調交響曲への意識 ►

交響曲作家としてのメンデルスゾーンの功績は、ベートーヴェンとブラームスの間を、シューマンとともにつなぐ役割を果たしたことにある。メンデルスゾーンは交響曲「イタリア」を、1833年に入る頃から「交響曲イ長調」と表現するようになるが、そこには当然ながら、同じイ長調の交響曲であるベートーヴェンの第7番が意識されていただろう。加えて本作には、若きメンデルスゾーンの野心作と言うべき試みを随所にみることができる。

曲の構成と音楽の特徴 ►

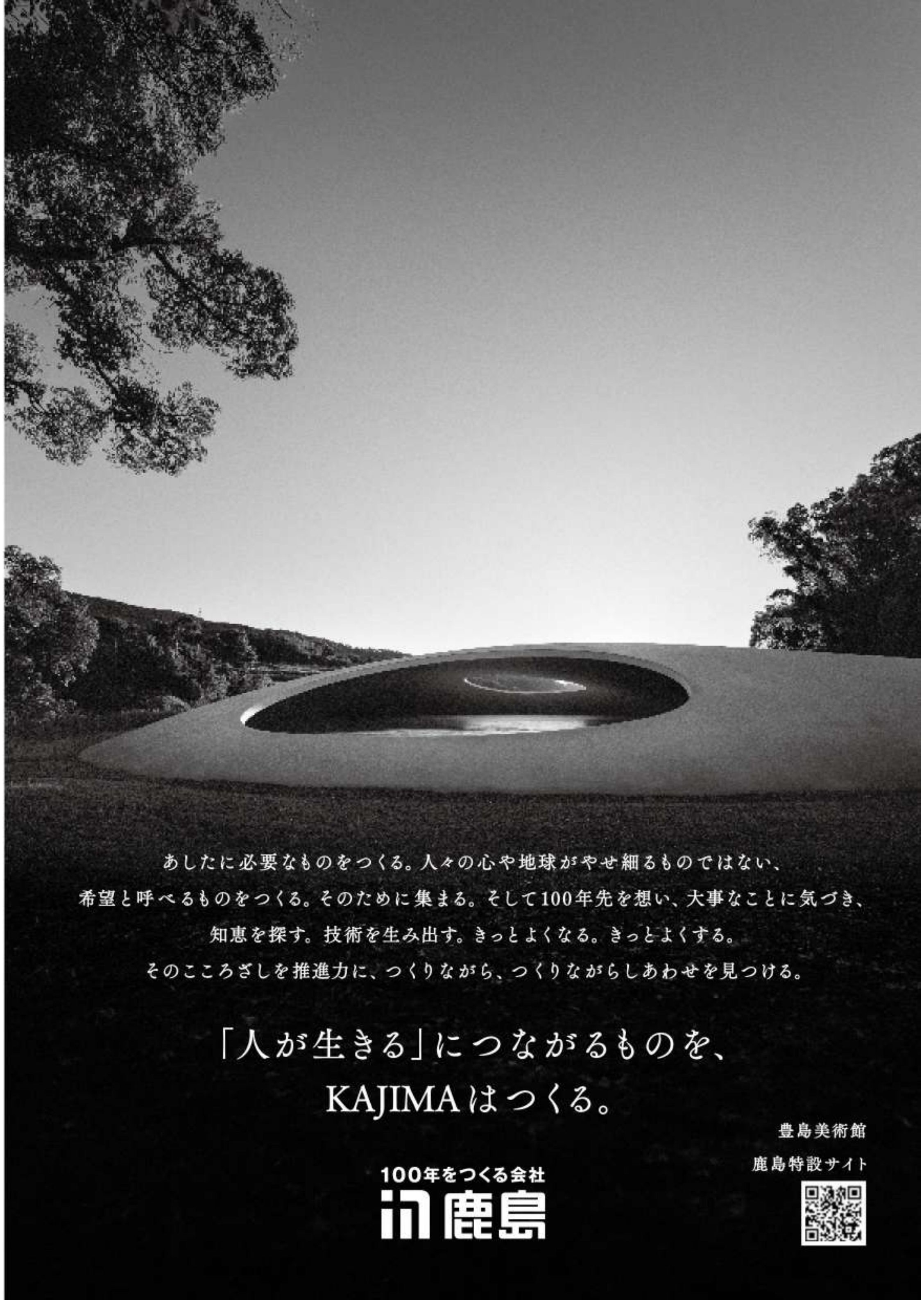
第1楽章は地中海の輝く太陽の光そのものの第1主題で幕を開け、第2主題もさわやかな表情を持つ。注目すべきは展開部に新たな展開部主題（ニ短調が第2楽章を予告し、フーガ的な書法が施される）が登場することで、再現部にもこの展開部主題が顔を出す。

第2楽章の緩徐楽章は、短調と長調の交代によるコントラストの妙技の音楽。

第3楽章はメンデルスゾーンらしい気品あふれるメヌエット楽章。中間のトリオは、狩のホルンを思わせる響きによって、しばしばドイツ・ロマン派的な森のイメージをもって語られる。

第4楽章は「サルタレッロ」と題された熱狂的なフィナーレ。長調の交響曲が短調で終わるのは極めて異例のことである。サルタレッロは18世紀末からイタリアで流行した3拍子の舞曲で、次第にテンポを増していく情熱的な踊り。メンデルスゾーンはその激しさをイ短調によって、その急速さを3連符によって1拍に3拍子を取り込むことで実現している。

［楽器編成］フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。



発想がうまれ、シェアする場所

シェアラウンジは、ラウンジの居心地と本による提案、オフィスの機能性を兼ね備え、訪れた人に「新しい発想を提供する場所」です。

新たな発想は心を躍らせ、生活を明るくし、世界をほんの少し良い場所にしてくれるもの。働く人だけでなく、お子さまや学生、主婦の方など、すべての人たちが日々の暮らしの中で、発想を必要としています。

ここに集まる多様な人々が風景をつくり、そこにいるだけで刺激がもらえたり、本からインスピレーションを得ることもできる。ある時は居心地の良いカフェやバーとして、またある時は体験を促すイベントスペースとして。

新たな発想を生む、たくさんの仕掛けが詰まった空間です。

SHARE LOUNGE by Culture Convenience Club

[SHARE LOUNGE]

代官山 蔦屋書店／丸の内／Olive LOUNGE 渋谷／渋谷サクラステージほか、全国に順次拡大中。最新の店舗一覧はアプリをご覧ください。

SHARE LOUNGE 公式アプリ

App Store

Google Play

SUMIDA TOBIRA of classic 2025-2026 Season #31

6.13[金] 14[土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第31回

2025年6月13日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
6月14日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

<指揮者によるプレトーク(開演約10分前~)>

◉ホルスト (1874–1934)

セントポール組曲 op. 29, no. 2 約15分

Gustav Holst: St. Paul's Suite, op. 29, no. 2

Ⅰ. Jig: Vivace
Ⅱ. Ostinato: Presto
Ⅲ. Intermezzo: Andante con moto
Ⅳ. Finale (The Dargason): Allegro

◉エルガー (1857–1934)

行進曲「威風堂々」第1番 ニ長調 op. 39, no. 1 約5分

Edward Elgar: Pomp and Circumstance March No. 1 in D major, op. 39 no. 1

——休憩20分——

◉ホルスト

組曲「惑星」op. 32, H 125 * 約50分

Gustav Holst: The Planets, op. 32, H.125 *

Ⅰ.	火星、戦争をもたらす者	Mars, the Bringer of War: Allegro
Ⅱ.	金星、平和をもたらす者	Venus, the Bringer of Peace: Adagio
Ⅲ.	水星、翼をもった使者	Mercury, the Winged Messenger: Vivace
Ⅳ.	木星、快楽をもたらす者	Jupiter, the Bringer of Jollity: Allegro giocoso
Ⅴ.	土星、老いをもたらす者	Saturn, the Bringer of Old Age: Adagio
Ⅵ.	天王星、奇術師	Uranus, the Magician: Allegro
Ⅶ.	海王星、神秘主義者	Neptune, the Mystic: Andante – Allegretto

[指揮] 佐渡 裕
Yutaka Sado, Conductor

[合唱] 栗友会合唱団 *
Ritsuyukai Choir, Chorus *

[合唱指揮] 栗山文昭 *
Fumiaki Kuriyama, Chorus Master *

[コンサートマスター] 西江辰郎
Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞
Mai Tategami, Assistant Concertmaster

演奏会アンケートはこちらから
https://www.njp.or.jp/qs

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール（公益財団法人墨田区文化振興財団）
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人 日本芸術文化振興会
■特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人オリックス宮内財団

文化庁

オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

Profile

©Takashi Iijima

佐渡 裕［指揮］ Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。故レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。1989年ブザンソン指揮者コンクール優勝。
これまでパリ管弦楽団、ロンドン交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団など、欧州の一流オーケストラに多数客演を重ねている。現在ウィーンで110年以上の歴史を持つトーンキュンストラー管弦楽団音楽監督、兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラの首席指揮者、「サントリー1万人の第九」総監督などを務める。
CD録音は多数あり、最新盤としてトーンキュンストラー管弦楽団を指揮した22枚目のCD『マーラー：交響曲第6番』を2025年5月にリリース。著書に『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』(PHP文庫／新書)など。出光音楽賞(1991年)、モンブラン国際文化賞(2003年)、渡邉暁雄音楽基金音楽賞(2003年)、岩谷時子賞(2014年)、文部科学大臣表彰(2024年)などの受賞歴がある。2023年4月より新日本フィルハーモニー交響楽団第5代音楽監督に就任。
オフィシャルファンサイト http://yutaka-sado.meetsfan.jp

栗友会合唱団［合唱］ Ritsuyukai Choir, Chorus

栗山文昭を音楽監督兼指揮者とする混声4団体、女声6団体、男声2団体で構成されている。各団が独自に定期演奏会、演奏旅行、レコーディング等を行いながら、「栗友会」としても活動を重ねている。NJPとも、歌劇『ローエングリン』、歌劇『ペレアスとメリザンド』、楽劇『トリスタンとイゾルデ』、シュミット「七つの封印を有する書」、マーラー：交響曲第2番「復活」、第3番、第8番「千人の交響曲」、ブリテン「戦争レクイエム」、ドヴォルジャークおよびロッシーニの「スターバト・マーテル」、オルフ「カルミナ・ブラーナ」、ハイドン「四季」、ブラームス「ドイツ・レクイエム」、フォーレ「レクイエム」など数多く共演している。

栗山文昭［合唱指揮］ Fumiaki Kuriyama, Chorus Master

島根県に生まれる。指揮法を高階正光、合唱指揮を田中信昭に師事。第20回中島健蔵音楽賞奨励賞受賞。2015年度下總皖一音楽賞受賞。現在「栗友会」の音楽監督及び指揮者として活躍する傍ら、一般社団法人音楽樹の芸術顧問として「Tokyo Cantat」などの企画・プロデュースに携わる。現在、武蔵野音楽大学名誉教授、島根県芸術文化センター「グラントワ」いわみ芸術劇場芸術監督。

Program Notes ◉ 小室敬幸［音楽ライター］

子どもの頃からピアノとヴァイオリンを習っていたグスターヴ・ホルスト(1874～1934)が、ロンドン王立音楽大学で作曲とともに主に学んでいたのはトロンボーンだった。学生時代にはトロンボーンが派手に鳴り響くワーグナーの音楽から強い影響を受けていたのだが、大学で出会って生涯の友となったレイフ・ヴォーン・ウィリアムズ(1872～1958)が“民謡”を採集しているのに感化され、ドイツ・ロマン派とは異なる作風へと変化していった。

ホルストの個性が生み出される上でもうひとつ重要なのは“神智学”や“インド文化”(ホルストが生まれ育ったチェルトナムは、英国の植民地だったインドで従事していた元軍人たちが多く住んでいたのだ!)等といった、超自然的なオカルトへの興味だ。後述するように、それがなければ『惑星』が生まれることもなかった。

■ ホルスト：セントポール組曲 op. 29 no. 2

創作の拠点となった学校名を冠して ▶

1898年に大学を卒業してからフリーランスのトロンボーン奏者として稼いでいたホルストは、1903年頃から作曲に専念しようと決意。けれども生計を立てるのが難しく、1905年から教鞭をとりはじめたのがこの前年にロンドン西部のハマースミスで創立したばかりのセントポール女学院であった。教職によって収入が安定しただけでなく、休日には学校の防音室が創作の拠点になっていく。

学校名を冠した「セントポール組曲」(1912～13)は音楽教育の主任であるホルストが指揮していた女学生たちの弦楽オーケストラのために書かれた作品だ。なお第4曲は、ホルストが作曲した「軍楽隊(吹奏楽)のための第2組曲」(1911)の第4曲を編曲したものである。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

第1曲「ジグ」は変則的なソナタ形式で、展開部が3つに分割されて第1～2主題のあいだに挟み込まれる(2拍子系と3拍子系の旋律が交代する第1主題、展開①、最初に第2ヴァイオリンが演奏しはじめる第2主題、展開②、第1主題の再現、展開③、第2主題の再現)。ジグとは16～17世紀にスコットランドやイングランド北部、18世紀にアイルランドでも流行した舞曲である。なおジグが大陸に渡って変化したのが、バロック時代の組曲に登場するジーグだ。

第2曲「オスティナート」は三部形式(A［3拍子］―B［2拍子］―A)。オスティナートとは“執拗な”という意味のイタリア語だ。音楽用語では“ひとつの音型を反復する”という意味で使われるように、この曲では“ミ・レ・ド・レ”という4音を、残り4小節に至るまで繰り返す。

第3曲「間奏曲」は五部形式(A［緩］―B［急］―A―B―A)で抒情的な

メロディと、軽快な音楽が交代。どちらの要素にも民族風のエキゾチックな音使いが紛れ込む。

第4曲「終曲(ダーガソン)」は、自由な変奏曲。17世紀に編纂された英国の民謡集にも掲載されている「ダーガソン(あるいはセダニー)」をもとにしたメロディが、オスティナートのように延々と繰り返されるなか、合わさるリズムやハーモニーが変奏されていく。そして途中で2度、イングランド民謡「グリーンスリーブス」のメロディが重ね合わされる。

[楽器編成]弦楽5部。

■ エルガー:行進曲「威風堂々」第1番 ニ長調 op. 39, no. 1

作曲の経緯 ►

ホルストより17歳年上のサー・エドワード・エルガー(1857~1934)は同じくイギリスの作曲家である。1899年——ホルストが大学を卒業した翌年だ——に初演された管弦楽曲「エニグマ変奏曲」の成功により、作曲家としての地位を築いた。その2年後に書かれたのがこの「威風堂々第1番」で、義父(妻アリスの父)が陸軍少将だったことから軍隊行進曲(ミリタリーマーチ)を作曲したとされる。

構成と特徴 ►

行進曲なので、マーチ主部とトリオ(中間部)が交代にあらわれるという構成だ。威勢のよい主部よりも中間部のゆったりとした旋律が有名で、イギリスでは「希望と栄光の国」という歌詞がつけられて愛唱されている。

[楽器編成]フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンバリン、スレイベル、グロッケンシュピール、ハープ2、オルガン、弦楽5部。

■ ホルスト:組曲「惑星」op. 32, H. 125

占星術との出会いから ►

超自然的なものに興味があったホルストは、作曲家アーノルド・バックスの弟であるクリフォードから紹介されてアラン・レオ(1860~1917)が著した占星術の本と出会う。神智学の支部設置にも携わったレオは近代占星術の父と称され、紀元前から続く西洋の占星術にインドの占星術を取り入れた。人の性格は生まれ持った運命的なものであるとしており、性格分類を擬人化した惑星(1912年に出版された『統合の技法 The Art of Synthesis』には擬人化イラストが付いている!)と結びつけている。1914~16年にかけてホルストが作曲した『惑星』の各曲につけられたタイトルは、レオの著作をもとにしてホルストの考えを加えたものである。

曲の構成と音楽の特徴 ►

第1曲「火星、戦争をもたらす者」はハ長調(ハ短調)で、4分の5拍子。中間部と終結部を除いて、圧迫感のあるリズムが延々と繰り返される上に、並行移動する和音が重ねられていく。

第2曲「金星、平和をもたらす者」は変ホ長調で、4分の4拍子。緩徐楽章にあたり、管楽器もしくはハープの明るい和音が連なっていくAのセクションと、ヴァイオリンが主旋律を奏でるBのセクションが何度も交代する。

第3曲「水星、翼をもった使者」はホ長調で、8分の6拍子。スケルツォにあたり、ハーモニーとリズムがロマン派まではあり得ないような変化をしていく。中間部では伴奏だけが2拍子になって淡い変化を生み出す。

第4曲「木星、快楽をもたらす者」はハ長調、4分の2拍子ではじまる。ソナタ風の転調を伴うロンド形式になっており、ソナタ形式の展開部がない代わりに冒頭から反復される「ミ・ソ・ラ」という音型が全体に散りばめられて展開される(4つの主題のうち、2つが「ミ・ソ・ラ」を移調した音型ではじまるのだ!)。

第5曲「土星、老いをもたらす者」はハ長調で、4分の4拍子。第1~4曲まではドイツ・ロマン派の交響曲のような構成だったのだが、全曲中で最も長いこの曲から大きく逸脱していく。敢えていえば2つめの緩徐楽章だ。冒頭から繰り返される和音は、ホルストが1915年に作曲した合唱曲「葬送歌と祝婚歌」の和音を変化させたものなので、死が近い状況を連想させる。その和音と、追ってコントラバスが弾くメロディが主題となって変奏されていく。

第6曲「天王星、奇術師」はホ短調で、4分の6拍子。冒頭で金管が引き伸ばす4音は、作曲者のスペルGustav Holst(「G=ソ/S=ミ♭/A=ラ/H=シ」)の音名象徴だと推測されている。デュカスの交響的なスケルツォである「魔法使いの弟子」をモデルにして奇術師≒作曲家としてのホルストを音楽で描いた自画像なのだろう。

第7曲「海王星、神秘主義者」はホ短調で、4分の5拍子。ホルストが好奇心を抱いていた神智学やインド文化の世界観を音楽で描いた3つめの緩徐楽章である。途中から歌われる女声合唱は初演の際には、セントポール女学院の学生たちも加わった。

[編成]フルート4(アルトフルート、ピッコロ2持替)、オーボエ3(バスオーボエ持替)、イングリッシュホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、テナーテューバ、バステューバ、ティンパニ2、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンバリン、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン、チャイム、ハープ2、オルガン、チェレスタ、女声合唱、弦楽5部。